

ウマ娘に憧れたヒト

べるぬい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『ウマ娘として産んであげられなくてごめんね』

ウマ娘に憧れたヒト。

彼女は幼い頃、とあるウマ娘のレースを見て、自分もウマ娘になりたいと思うようになった。しかし彼女はヒト。ヒトはどう足掻いてもウマ娘になれないし、ウマ娘に叶うはずもない。一時期は諦め、叶うはずもない夢だった。

しかし彼女はある日、自分が特異体質であることを知る。自分は見た目こそ人間だが、身体能力はウマ娘に劣らないことを。彼女は進路をトレセン学園へと迷いなく決める。

そして無事に入学。彼女は夢の一步を踏み出す。そして憧れたウマ娘と同じ地面を踏み締め、レースに出ることを決意する。でもレースに出るにはまずはトレーナーにスカウトされないといけなくて？

これはウマ娘に憧れたヒトの少女が、ウマ娘となり、自分の夢を叶えるお話である。

その少女の名は――

――ハリボテエレジー

※独自設定あり

※ゲームの世界線寄りです

※モブのウマ娘の名前は適当です

※解釈違いなどある可能性があります

※矛盾など生じる可能性があります

※競馬等の知識はまだまだ初心者です。間違いなどありましたら是非ご指摘お願いします。故に年代やらはバラバラです。ご容赦ください

目次

1.	憧れの景色	1
2.	選抜レース	6

1. 憧れの景色

『ウマ娘として産んであげられなくて、ごめんね』

私がウマ娘のレースを見て、いつか私もあのターフの上で走りたいと言う度に、母は辛い顔をしていた。

私は知らなかったのだ、声援の中、ターフの上を瞬く間に駆け抜けるその姿にヒトはなれないということ。

私には耳も尻尾も……そして脚も無い。あるのはごく普通のヒトの肉体のみ。ウマ娘は私の憧れだ。速く美しく、何よりかっこいいのだ。

私も速く走りたい。ステージの上で輝きたい。己の存在を認め合うライバルと高め合いたい。誰もが心を奪われる走りを私も魅せたい。

そして何よりも、怪我をして引退してしまった母の夢を叶えたい。幼い頃からの夢を

叶える為に私は――



「よう！今日もトレーニングに励んでんな」

「あーん？オメー今日も暇してんのかよ。オルフェーヴルとかほつといてもいいの
か？」

「アイツら俺いなくても強いもん。好きにやらせた方がいい」

「うちのトレーナーに用か？」

「ま、そんなところだ」

「今呼んでくるぜ」

白銀の髪と尻尾を揺らして小さくなつていく背中を見送る。チームシリウスに所属して
るウマ娘、ゴールドシップ。昨年の皐月賞でワープしたかのように先頭に立ったあ
のレースは凄かったな。

「や、神鳴沢。僕になんか用だつて？」

「よ。新入生についてだよ」

「ああ。新入生ね。素質ある子でもいた？」

「素質……というより異質な子なら」

「へえ。どんな感じだったの？」

「顔を隠してるんだ。ダンボールでな」

「え？ダンボール？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。誰だつてそういう反応はするだろうな。エルコンドルパサーやオルフェーヴルみたいにマスクをしたりするウマ娘はいるが、なんせダンボールで顔全体を隠してやがる。耳もだ。

「その子、面白そうだね」

「そうなんだよ。スカウトしようかなつて」

「へえ！君がかい？」

「何だよその含みのある言い方は？」

「だって、チームに所属してるウマ娘のスネかじりって言われてるじゃないか。この間の週刊誌でも君ボロくそに言われてたぞ」

「泣いた」

うちのチームは三冠ウマ娘が2人いる。1人は無敗の三冠ウマ娘、もう1人は無敗では無いけれど、最強の三冠ウマ娘と名高い。故にウマ娘自身の実力であり、トレーナーである俺は無能だと言われている。悲しい。

ちなみにもう1人うちのチームに所属してるウマ娘がいるのだが、現在海外留学中だ。

「そういうお前は天皇賞連覇して、三冠も取ったし順調そうだな」

「まあね。君も今確か彼女が留学中だろ？」

「そうだな。着いていこうとしたんだが、拒否された」

「嫌われてるね」

「泣いた」

まあそれはさておき、選抜レースが1週間後にある。気になるあの子以外にもいい素材がいるといいが。

2. 選抜レース

まさか選抜レースでチーム、もしくはトレーナーにスカウトされないとは……。いや、事前に調べて知ってはいたけど……知ってはいたのだけれども……。

あまり自分に自信はない。従来のヒトよりは丈夫な体だが……まだ私は1度もウマ娘と全力で走ったことがない。走れるのか？ 私は……いや、夢を叶えるんだ。私は。

「ねえねえ！ 君、ハリボテエレジーちゃんだっけ！」

「え？ まあ……そうだけど」

「隣のクラスのコントレイル！ よろしく！ こっちはデコリングちゃん！」

「ちよつとその呼び名やめてくれない？ 私はデアリングタクト。よろしくね」

「え？ あ、よろしく……」

2人とも隣のクラスのウマ娘だ。きつとライバルになるだろう存在。2人は特にオーラが違うように見える。ところで入学してから1ヶ月経ったけど、なぜ今頃話しかけてきたのだろうか。

「……えと。何か用？ 先生に呼ばれたとか？」

「うーん！お昼の時間だし一緒に学食に行かない!?!と思ってたさー！」

「学食…ね」

「ええ。エレジーさん、お昼になるとどこかに行かれてしまいますから誘うのもなかなか難しくして」

なるほど。となるとまさか約1ヶ月も私に声を掛けようとしてくれていたのだろうか。何だか申し訳ない気持ちになる。けれどお誘いに乗ることも出来ない。

「誘ってくれてありがとう。でも私、お昼は一人で食べたいの。ごめんね」

私は購買で買った昼食を持ち、逃げるように席から離れる。

「ほら。ダメだったでしょ」

「うーん。エレジーちゃんの顔が気になるんだよなあ」

「他人には見せたくない怪我とかがあるのかもしれないじゃない。空気読みなさいよ」

「そっかー。そだよねー…。先生たちも何も言っていないし…公認なわけだよね。あの不思議な被り物」



…ふう。ここは他の生徒はほぼ来ないから安心してご飯が食べれる。ウマ娘のみんな

なは学食を使用するからね。屋上なんて誰も来やしない。屋上へと続く扉を開けると、暖かい風が頬を撫でる。

「本当に入学したんだな……私」

そう実感すると拳に力が入る。選抜レースは今日である。ヘマは出来ない。着順はどうあれ、スカウトされるような走りが出来ればいいんだけど。

「……さて、ご飯食べましようかね」

購買で買ったパンやおにぎりを頬張る。本当は学食に行つて、私も皆と色んなものを食べてみたいのだが、正体がバレる恐れがある為、学食には行けてない。それにこの被り物を気味悪がつて友達すらできない。

コントレイルさんとデアリングタクトさん。こんな私な話しかけてくれて……きつといい人なんだろうな。

「んがつ……んあ……あ、お前」

「は？」

屋上の入口の上にある貯水タンクがある所から声がした。そちらに向くと髪が長くボサボサで、如何にも身だしなみを気にしてない風貌の男がいた。

「お前。新入生だろ？名前はなんだ？」

「……ハリボテエレジー」

「ハリボテエレジー…か。 ……覚えた」

「え？」

「お前、今日選抜レースだろ？」

「え？あ、ああはい」

「頑張れよ」

そう言うとうちは身軽なのか高めであるにも関わらず、屋根から飛び降りドアを開けて校内へと消えていった。何だったんだあの男は。ふと、先程の男が着地したところに何か落ちてるのを見つける。

「これって…トレナーナーバッジ…!?あの男トレナーナーだったのか…」

こんな所で昼寝でもしてたのか。あの男は。と、トレナーナーバッジを少し眺め、ポケットにいれ時計に視線をやった時には、昼休みが終わる1分前だった。



トレセン学園にあるレース場に大勢の人が集まっている。私もそのうちの一人だ。トレーナー、教師、多くのウマ娘が集まっている。

ちなみに私はレース用の体操着である。選抜レースに出るからだ。深呼吸して緊張

を抑えようとする。足が震える。けどそれ以上に高揚感が高まる。

「エレジーちゃん！同じレースだね」

「あ、コントレイルさん」

「もー！さんなんて付けないでいいよ！コンちゃんって呼んでくれてもいいんだよ」

「ははは…善処するよ」

随分と余裕そうな雰囲気醸し出してる。実際コントレイルさんは今年かなり注目されてるウマ娘だ、かと言って諦めるつもりも負けるつもりも無いけど。

「……」

「あ、私たちの番だね。行こ。エレジーちゃん。デコちゃんも同じだからさ。負けないからね」

「うん」

私は私が一番分かっている最大の弱点がある。ウマ娘とヒトの決定的な差なんだろう。やはり脚の作りが違うんだろうか。不安な気持ちを抑えるようにゲートへ入る、

ドンッ

『さあそれぞれのウマ娘が綺麗にスタートしました！』

実況の声が耳に入ってくる。良かった。出遅れはしなかった。今回中距離の2200m。きつと長いようで短い。気は抜けない。

『現在、注目されてるコントレイルは五番手にいるぞ。それを追うようにハリボテエレジー!』



「始まったな」

「ほんとだ。かなかなの言う通りじゃん」

「かなかな言うのやめろ」

同僚の間で言われるあだ名を否定しつつ見るのは、新人の選抜レース。現在走ってる中で異彩を放つのはコントレイル、そしてハリボテエレジー。

アイツはコーナーを綺麗に曲がれない。思った通りだ。

『あぁーつと!ハリボテエレジー!コーナーで外に広がってくぞ!』

……どうしようもないな。あれは。…スカウトしてみようと思ったがあれじゃあな。いくら面白いと言っても…な。

「期待外れだったか」

「そんなこと言つて。最後まで見なよ。彼女の顔はウマ娘のそれだよ」

「被り物で見えねえのに何言つてんだ」

コーナーを曲がり終え、自ら大きく外にズレてつた結果、一番後ろに付いてやがる。さあここからどうする？



クソ!! やつぱりコーナーをあの速度で曲がるのはヒトの肉体じゃ限界がある。これじゃあ一着はおろか入着すら怪しい…!

コントレイルさんはもう見えない。追いつけるのか？ 私は。これからやってけるのか？ 私は夢ばかり見ていて現実を見ていなかったのでは？

『母さんもね。走ってたんだよ。昔。ダービー制覇、してみたかったなあ』

「…母さん」

母さんはダービー制覇が夢だった。ダービーウマ娘になるのが何よりの夢だった。

けれど母さんはダービー出走直前で、幼いウマ娘を庇い、事故で怪我をした。勿論ダービー出走は出来なかった。

『ダービーで勝てなくても…せめてG1レースで勝ちたかったねえ』

…諦めるな。私は今ヒトじゃない。ウマ娘だ。実質^{ハリ}を伴^{ボテ}わない哀歌^{レジ}だ!!

『さあ!最後の直線だ!先頭はコントレイル、そのすぐ後ろをデアリングタクトが走っているぞ!!そして大外からハリボテエレジーが上がってきた!!……え!?ハリボテエレジーが上がってきた!!』

負けない!諦めない!まだ始まったばかりじゃないか!!母さんの代わりに私がG1を制覇するんだ!!

『残り200m!まだコントレイルが先頭だ!!デアリングタクト、そしてとんでもない大外からハリボテエレジーが食い下がる!コントレイルか!?デアリングタクトか!?ハリボテエレジーか!?僅かにコントレイルか!!』

「…ツハアハア……負けた……」

「…驚いたよ。エレジーちゃん、コーナー曲がるの苦手なんだね」

「…うん。私の欠点」

「でもそれを補えるほどのあの直線の伸び。もしコーナーを綺麗に曲がれていたら、と
考えたら私たちは確実に圧勝されて負けてました」

「デアリングタクトさん」

私が綺麗に曲がれていたら勝てた…だって？二人の走りを見ていたらそうは思えない。
い。圧勝は流石に有り得ないだろう。

しかし選抜レースで3着…か。スカウト来るのかなあ。間違ひなくコントレイルさんとデアリングタクトさんはスカウト来るだろうなあ。

と、2人と少し話していたらスカウト目的だろうトレーナーらしき人物がゾロゾロと
囲むように集まってきた。え、これ私バレない？大丈夫かな？

「はいはいはいはい通りマース！そして3人とも貰ってきまーす！」

「うえっ」

「あわわっ」

「ひっ」

え、誰この人。私たち誘拐される？え??えー??